

これからの社会が求める 「新しい高大接続」

中央教育審議会会長を務める安西祐一郎氏に、中教審高大接続特別部会臨時委員でもある小社「カレッジマネジメント」編集長が、「新しい高大接続」の形についてうかがいました。

まとめ／堀水潤一 撮影／富永智子

多極化・少子高齢化の進む 20年後に幸せに生きるために

▼聞き手



リクルート
「カレッジマネジメント」編集長
小林 浩

リクルート進学総研所長。中央教育審議会高大接続特別部会臨時委員。「大学ポートレート（仮称）準備委員会」委員、中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ臨時委員、専修学校生への経済的支援の在り方に関する検討会委員。

——現在進められている教育改革について安西先生はよく、「今ではなく、未来のため」と言われています。今の子どもたちが活躍するところ、社会はどのように変化していきますか。また、そのとき必要とされる力とはどのようなものだとお考えですか？

多極化・グローバル化が進行し、世界の影響力がますます日本へ及ぶでしょう。それは非常に複雑な世界です。「同僚は世界中から」という職場も普通に存在するはずです。生産年齢人口の減少も加速していきます。でもこれは、若い人にとってチャンスかもしれません。実力次第で好きな仕事に就きやすくなるのですから。

そうした社会で求められる力として、私は「主体性・多様性・協働性」の3つをあげたいと思います。

すなわち、一人ひとりが自分で考え、独立して行動できること。また、多様な人たちが互いに認めあい、協力して生きることです。

——そんな話を学校の先生方にすると、「うちは自主性を重んじています」

「本学はAO・推薦入試が盛んで多様な学生が入学しています」と返答されることがあります。しかし、本当に背景の違う人々が共に学んでいるといえるでしょうか。将来、未知の世界に放り出されたとき、やりたいことを存分にできる強い意志をもった若者が育っているでしょうか。

例えば日本の大学の場合、学部のある学生のうち約3%しか社会人がいません。世界的に見れば異常に低い数字です。偏差値や経済格差の問題まで考慮すると、結局は同じような年齢、学力、家庭環境の若者が一緒に学んでいるのが日本のキャンパスの姿です。

「みんなと揃って」「人と違ったことはやりにくい」「言われたことはできるけれど、自分からは……」。今ほとんどもかく、20年後もそういう人であふれていくとしたら、多極化・少子高齢化のなかで日本は沈みかねません。そうした危機感が、今、取り組んでいる教育改革の議論の根底にあります。

——改革の目標を、「子どもたちが主

体的に人生を拓き多様な他者と協働して幸福に生きていけるようになること」とされていますが、特に高校教育改革はどのようなところに焦点を当てていますか？

——高校教育改革の最大の課題は、「高校が、大学合格だけではない目標を明確に持てるかどうか」だと思います。

私が考える目標は、「多様な生徒が主体的に学び、市民性を身につけることのできる学びの場の創造」です。簡潔に言うなら「主体性・多様性・協働性」の土台をきちんと身につけること。そのためには当然、学力の3要素である基礎的な知識・技能やそれを活用する力、学習意欲も必要になります。高校卒業後すぐ働く若者にとっては



安西 祐一郎



Yuichiro Anzai

1946年生まれ。慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程修了。北海道大学文学部助教授、慶應義塾大学理工学部長などを経て、2001年慶應義塾塾長（～09年）。11年10月より独立行政法人日本学術振興会理事長。中央教育審議会会長、日本ユネスコ国内委員会会長ほか役職多数。

「求められる 主体性・多様性・協働性」

それらの力が実践に生かされ、専門学校に進学する人にとっては手に職をつけて夢を実現するための基盤となり、大学を志望する人にとっては自身でキャリアパスを描いていけるようになってほしいと思います。

学校の事情などさまざまな制約もあって、最初の一步が踏みだしにくい状況にある高校生が多いように思います。その点、専門学校を志望する生徒は目標を明確にしている子も比較的多いのではないのでしょうか。コンピュータ嫌いの子がITの専門学校に行くことはあまりないわけで、そういう意味では進路選択に主体性があるといえます。私が専門学校に期待する点

は他にもあります。

人は生まれながらにして多才な能力を持っていますが、その能力を見つけ、磨き、生きるための糧を得て、他者に尽くすということが、おそらく幸せな人生でしょう。ところが、若い人が夢を語るるとき、往々にして糧を得るという部分が抜け落ちるのです。そういう意味で、職業に直結した進路選択というのは立派だと思えます。課題とされるのは普通科高校から

「なぜこの大学を志望したのかよくわからない」と感じている若者も少なくないでしょう。アメリカの大学の面接では「あなたは私たちの大学にどう貢献できますか？」という質問をされる

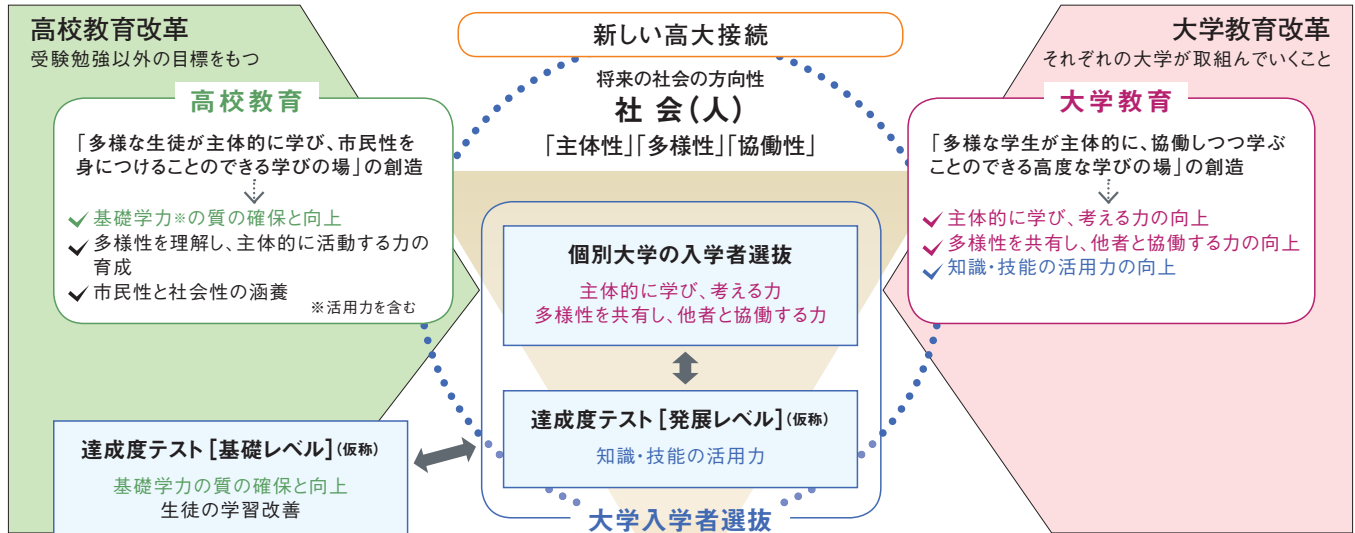
ことがあります。アメリカの教育にも多々問題はありますが、こうした質問にまともな答えられる日本の高校生はどれだけいるのでしょうか。このような状況を改善するためにも大学入学者選抜のあり方を抜本的に変える必要があると思っています。

——大学入学者選抜はどのように変わっていくべきなのでしょう？

議論は継続中であり、あくまで私案（図）ですが、個別の大学の入学者選抜においては、まさに主体性・多様性・協働性という観点を多面的に評価するべきだと主張しています。具体的な選抜方法としては、面接、討論、論文、調査書や活動報告などが考えられますが、いずれにしろ従来のようなペーパーの一斉学力試験は課さないというのがここの考え方です。各大学の入学者選抜において一斉ペーパーテストによる学力検査に深く踏み込むのであれば、今までと何ら変わりません。それは、先に述べた「みんなと揃って」「言われたことはできるけれど、自分からは…」という人材を生みだ



■ 高校教育・大学入学者選抜・大学教育の一体改革



2014.8.22高大接続特別部会配布資料安西先生メモを修正



し続けることと同じです。

とはいえ入学者選抜において、知識・技能とその活用力の評価が不要なわけもなく、それを評価するのが国レベルで実施する「達成度テスト（発展レベル）」（仮称）です。このテストで重視したいのは活用力。つまり単なる知識・技能の蓄積ではなく、さまざまな状況下で臨機応変に使える力のことです。そのため教科の枠を超えた「合教科・科目型」の出題や記述式などの特徴をもたせるべきではないかと考えています。例えば言語に関連する問題として、国語の長文を英語で要約するなどの出題も考えられるでしょう。難易度も広範囲にわたるべきでしょう。各大学はこのテストの成績条件をアドミッションポリシーに明示し、その一方で主体性、多様性、協

大学入学者選抜だけではない 一体的な教育改革を

働性を前面に掲げた入学者選抜をすることで、学力を担保しつつ、その後の人間育成ができるはずですが、もう一点、活用力の前提となるのが、教科・科目の基礎知識・技能とその基本的な活用力であり、それを評価するのが「達成度テスト（基礎レベル）」（仮称）です。高校段階における力の目安になるもので、多様な高校にあわせて難易度は広範囲に設計すべきだと思います。これらのテストや各大学の新たな入学者選抜の実施に向けて

困難はありますが不可能ではありません。官民一体となり、今こそ大転換を図るときです。

それには、大学が多様な学生が主体的に学ぶことのできる場になっていくことが重要です。このような大学教育の改革と、大学入学者選抜、そして高校教育の改革が並行して行われなければ意味がないのです。

例えば海外青年協力隊の経験者を優先的に採用するといったことなどです。

また、わたしは雇用についても改革がおこなわれなければならないと思っています。ペーパーテストの入試に合格してそのまま大学を出た者ではなく、

——採用側の企業としても社会構造の変化そのものを起こす責任を感じます。高校の先生方はこれらの改革案をどう考え受け止めればよいでしょうか。

この時代の時代を生き抜いていく若者のために、今、高校ができることは何か。それを考えることが大事です。ぜひ、20年後の世界をイメージし、そこを見据えた教育を行ってください。受け身の教育から能動的な学習へ。入試という入口から卒業後を見越した社会のあり方をイメージしてください。人と比べるのではなく、自分がどうありたいか。人生は一本線ではなく、複数の道があります。

そうしたことを、心から、腑に落ちる形で、私たち自身が認識し、実践しないことには、子どもたちの未来は開けないと思っています。

そのままで大学を出た者ではなく、

そのままで大学を出た者ではなく、